

令和2年6月

青 藍 会 会 報

第 95 号

徳島大学医学部医学科同窓会



憂いの多いこのときに、人が寄り添うことが
優しさであり、優れた未来につながるように
思っています。

徳島大学大学院医歯薬学研究所
放射線医学分野
教授 原 田 雅 史



壮大な明石海峡大橋

全長3,911m，最大支間長1,991mで世界最長のつり橋です。1998年（平成10年）の開業以来「ギネス世界記録」に認定されている壮大な橋です。

撮影 佐藤 隆久 (医学部24期)

青藍会総会開催のご案内

日時: 令和2年7月12日(日)10時30分～16時30分

場所: 青藍会館大会議室

1 議事

2 懇親会

3 青藍会賞受賞者学術講演

徳島大学 AWA サポートセンター准教授

石澤有紀先生(医学部54期)

演題「薬剤誘発性大動脈解離易発症モデルマウスの確立と
大規模医療情報データベースを用いた予防薬探索」

座長 玉置俊晃先生

4 学術講演

山口大学大学院医学部研究科器官解剖学教授

中村教泰先生(医学部38期)

演題「ナノ医学・セラミックスの発展に向けて」

座長 玉置俊晃先生

川崎医科大学病態代謝学教授

松田純子先生(医学部35期)

演題「スフィンゴ脂質の構造多様性と疾患:小児の希少難病から
生命の動作原理の解明へ」

座長 荒瀬誠治先生



中止



※昼食を兼ねた懇親会を開催いたします。

時間: 12:30～14:15

場所: 青藍会館2階(旧レストランエルボ)

会費: 3000円

COVID-19

北海道支部長

石丸 裕 晃 (医学部27期)

新型コロナウイルスに対する緊急事態宣言はゴールデンウィークで終了の予定でしたが、5月いっぱい延長されることになり、自粛生活は継続しています。ただ全国的には次第に収束してきており、一部の地域では緊急事態宣言は解除されました。

今回の主役であるコロナウイルスとはゲノムとしてリボ核酸 (RNA) をもつ一本鎖プラス鎖 RNAウイルスで哺乳類や鳥類に病気を引き起こすウイルスのグループのひとつです。このウイルス群で最初に注目を浴びたのは2002年11月 (のちに7月と訂正) に中国の広東省で40歳台の男性が発症した重症急性呼吸器症候群 (SARS) です。この際、中国は自国の名誉と信用を守るため報道を規制し、WHOに報告したのは2003年2月であり、そのために国際的な対応が遅れ、被害を拡大させてしまいました。最終的な罹患数は世界30か国の8422人が感染、916人が死亡しました。その後2012年にはヒトコブラクダを感染源として、重症肺炎を引き起こす中東呼吸器症候群 (MERS) が発生し、現在も流行中です。2019年11月までに診断確定者は2494人、死者は858人、世界27か国に波及しています。さらに昨年12月に中国湖北省武漢市から感染が始まった新型コロナウイルスによる疾患はCOVID-19と呼ばれます。今回の場合も中国政府はSARSの経験をまったく無駄にして自国での対応が遅れただけでなく、世界への発信も遅れてしまったため、今回の大流行に至ったと考えられます。現在 (5月14日) 日本国内の感染者数は1万6千余名、世界では432万人以上の感染者数となっています。この点に関して、中国政府は謝罪の言葉ひとつなく、自国での流行を抑制できたことを強調しているのみです。中国政府は国際社会での地位、責任、役割分担などに関してどのように考えているのでしょうか。これまでの対応に対して腹立たしい思いを抱いているのは私だけでしょうか。

今回北海道がほかの地域よりも早く流行したのは雪が降る時期で屋外での活動が少なくなることで、暖房を使うために換気が悪い密室になりやすいこと、札幌圏と地方を電車やバスで行き来するのに時間がかかることなどが考えられますが、一番の原因は札幌雪祭りを強行したことと思われます。第71回札幌雪祭りは本年1月31日から2月11日まで開催され、全体で202万人もの来場者がありました。これだけの不特定多数の人が集まったためにその後に急速に感染が広まったと考えられています。北海道は全国に先駆けて緊急事態宣言を出し、一時は収束したかのような状況になりましたが、宣言解除後に第二波と思われる感染者数の急激な増加が起きました。再度の緊急事態宣言により最近はまだ収束しつつありますが、海外からは経済を優先しての早期の宣言解除が失敗だったのではとされています。北海道の経験を教訓として、他の地域に第二波が来ないように地域ごとの慎重な対策が必要と思われます。新型コロナウイルス感染者の治療にあたっておられる方々だけでなく、自らの感染の危険を恐れずに日常診療に当たられている青藍会会友の皆様のご活躍とこの流行の早い収束を祈ります。

令和2年5月14日 記

目次

○題 字	原 田 雅 史
○写 真	佐 藤 隆 久
○青藍会総会開催のご案内（新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止いたします）	
○巻 頭 言	石 丸 裕 晃
○青藍会の助成活動	
青藍会奨励賞の授与（2019年度医学研究実習ポスター発表優秀者）	1
徳島大学病院卒後臨床研修センターの活動報告	安 倍 正 博 2
○支 部 紹 介	3
○支 部 だ よ り	
東 京 支 部	上 田 茂 5
近 畿 支 部	播 村 佳 昭 6
兵 庫 支 部	檜 林 勇 7
愛 媛 支 部	米 田 浩 二 8
○会 員 通 信	
増女（ぞうおんな）—日本の美—	國 重 昭 郎 9
ポプラ会会報 第90報・第91報	四 宮 孝 昭 10
寒くなりましたね，我が5期生も青色吐息	齋 藤 元 12
令和元年7期生同窓会	浦 野 純 子 13
医学部10期生同窓会，千里阪急ホテルにて	藤 原 靖 14
オールドワングル会	檜 林 勇 15
医学部第17期同窓会報告	伊 井 節 子 15
令和元年 医学部18期生同窓会 始末記	福 川 徳 三 16
卒後45周年記念クラス会	香 川 和 夫 18
24期同窓会報告	福 島 泰 江 19
70周年“アラかん同窓会”，そして第16回同期会（案内）	本 田 壮 一 20
第6回はちはち会（医学部34期，1988年卒業生同窓会）の報告	井 川 洋 21
南アジア地区世界家庭医機構	板 東 浩 22
俳 句	小 谷 雄 二・零 俊 一・真 鍋 正 広 24
○徳島大学の動き	
徳島大学大学院医歯薬学研究部定年退任教授挨拶	香 美 祥 二 25
徳島大学大学院医歯薬学研究部新任教授紹介	森 岡 久 尚 26
	和 泉 唯 信 27
	秦 広 樹 28
徳島大学病院新任教授紹介	坂 東 良 美 29
徳島大学キャンパスライフ健康支援センター新任教授紹介	井 崎 ゆみ子 30
○留 学 記	
テキサス大学留学を終えて	堀 口 航 31

○MD-PhDコース同窓会報告	石澤有紀	32
○準会員だより		
基礎研究との出会いを通じて	河本知大	33
医学生とは	清水光希	33
日常1	松田晃輝	34
○青藍会の動き		
青藍会出身教授一覧		35
青藍会出身病院長就任挨拶	横田一郎	36
	都築英雄	36
	宮田淳也	37
医学部66期卒業生（令和2年3月卒業）		38
会員の異動		39
物故者		40
青藍会会費納入状況		41
会費納入のお願い		42
○投稿規定		43
○事務局からのお願い・ご注意ください!!		44
○第37回青藍会・医学科講演会開催のお知らせ		45
○編集後記	工藤美千代	46

新入生歓迎会の開催中止について

令和2年4月6日、徳島大学が新型コロナウイルスの感染拡大状況に鑑み、令和2年度徳島大学入学式の開催を中止されたことに準じ、青藍会主催の新入生歓迎会の開催も中止いたしました。新入生にはご入学を祝して、桜井えつ会長からのお祝いメッセージを添えて青藍会だより・会報第93号をお贈りいたしましたので、お知らせいたします。

青藍会の助成活動

青藍会奨励賞の授与（2019年度医学研究実習ポスター発表優秀者）

青藍会奨励賞を受賞して

鴻本 未咲 (医学科3年)

この度は医学研究実習のポスター発表において、青藍会奨励賞という素晴らしい賞を頂き、誠にありがとうございます。本研究を評価していただいたのも、熱心に指導して下さった病態生理学分野の先生方や共に励んだ友人のおかげです。今後も感謝の気持ちを忘れることなく、研究を通して得た知識や経験を活かしていきたいと思います。

杉田 瑞季 (医学科3年)

この度は青藍会奨励賞に選んでいただき誠にありがとうございます。

研究室では今まで教科書でしか触れてこなかった様々な実験を繰り返し経験することができ、結果が必ずしも予想通りにいかないことも実感することができました。この経験を生かし、より一層勉学に励んでいきたいと思います。

長尾 俊紀 (医学科3年)

この度は、私の研究内容を青藍会奨励賞という形で評価して頂き、非常にうれしく感じております。私の研究内容は基底膜形成に関するものでした。人体において非常に重要な役割を果たす構造を解明し、学生にできるだけ理解しやすく発表できたと自負しております。半年という短い研究生活でしたが、普段の勉強とは違った苦労があり、研究の難しさを度々実感しました。しかし、研究発表を終え、こうして奨励賞を頂いたことで、研究を経て、学生として大きく成長できました。担当教官の栗栖先生にも研究面だけでなく生活面でも多くの相談ができ、様々なことを学びました。この場を借りて、研究生活を支

えてくださった細胞生物学の先生方に感謝を述べたいと思います。ありがとうございました。

永井 晶子 (医学科3年)

この度は青藍会奨励賞という栄えある賞を頂き、本当にありがとうございます。この医学研究実習にあたって熱心にご指導くださった病態生理学分野の先生方をはじめ、本実習の機会を与えてくださった先生方や一緒にごがんばった研究室の友人に心より感謝いたします。今後、研究を通して学んだ知識や考え方を生かし、学びに妥協することなく努力していきたいと思います。

松尾 崇 (医学科3年)

この度は奨励賞という素晴らしい賞を頂き、本当にありがとうございました。研究実習での日々の努力が報われたような思いがして非常に嬉しいです。私自身の研究分野は疫学でしたが、将来この経験を医学に応用できればと思います。

石井 佑佳 (医学科3年)

この度は青藍会奨励賞に選出していただき誠にありがとうございます。実験ではなかなか結果が出ないこともありましたが、改善策を試行錯誤しながら考えていく楽しさを知ることができました。今後もこの経験を活かし一層勉学に励んでいきたいです。

白石 夏央 (医学科3年)

この度は、青藍会奨励賞という素晴らしい賞をいただき、大変嬉しく思います。約10ヶ月間にわたる医学研究実習において、先生方からご指導いただきながら自分の研究テーマについて探究できたことはいい経験になりました。ありがとうございました。



徳島大学病院卒後臨床研修センターの活動報告

卒後臨床研修センター長

安倍 正 博 (医学部30期)

青藍会ならびに会員の先生方からは、当院の研修医へのご指導ならびに卒後臨床研修センターの活動に対しご協力と暖かいご支援賜り、誠にありがとうございます。

今年度のセンターのメンバーは、私と副センター長の西京子特任准教授（脳神経外科）、田中久美子特任助教（消化器内科）、河北直也特任助教（食道・乳腺甲状腺外科）および角田宗之特任助教（循環器内科）の5名の教官と5名の事務スタッフです。スタッフは研修医との心の交流に努め、より良い研修環境を構築するために一丸となり活動をしております。お陰で研修医が仲良く元気に切磋琢磨しながら成長していることを実感しています。

徳島大学病院卒後臨床研修センターの近況をご報告させていただきます。令和2年3月4日、新型コロナウイルス対策の影響で出席者が限られましたが、徳島大学病院医師卒後臨床研修管理委員会にて徳島大学病院基幹型臨床研修プログラム研修医24名の研修終了が認定されました。研修を修了した研修医からは喜びの声とともに、お世話になった研修病院の指導医の先生方への感謝が述べられておりました。この4月より、修了者のうち20名が徳島大学病院の診療科およびその関連施設で専門医研修プログラムの専攻医として様々な分野の専門研修を開始しています。令和2年度は1年目の研修医を17名迎えました。平成30年度から開始した「メディカルゾーン重点研修プログラム」は、県立中央病院との融合研修を取り入れた全国的にも類を見ない魅力的な研修プログラムですが、新しく2名が参画してくれました。2年目の研修医は22名で、現在計39名の研修医が当院のプログラムで研修しております。

医師臨床研修制度の見直しにより、令和2年度からの到達目標の達成度評価は、各分野・診療科のローテーション終了時に医師及び医師以外の医療職が研修医に対して形成的評価（フィードバック）を行うことになりました。今年度からの研修医に対し、

この見直しに対応した新しい評価システムとして国立大学病院会議が開発したEPOC2（オンライン臨床教育評価システム）を用います。本院ではすでに360度評価を実施しており、現在双方相互評価は1ヶ月毎に卒後臨床研修センターの教員が評価を確認して随時面談を行っていますが、今後研修医および指導医などの評価者がEPOC2へ速やかに入力することが必要となります。また、このEPOC2は、卒後臨床研修（厚生労働省所管）と卒前臨床実習（文部科学省所管）のシームレスな連携を目指して機能拡張中であり、卒前機能は2021年度中の運用開始が予定されているとのことです。

新型コロナウイルス感染拡大や、NPO法人卒後臨床研修評価機構（JCEP）による臨床研修評価への対応など喫緊の課題があり、そして今後徳島大学医学部医学科生の徳島県出身者数が減少しますが、このような状況で研修医、専攻医を確保するためには皆様とともにいかに魅力ある研修を提供できるかだと思います。当センターは、良い意見は幅広く取り入れ、柔軟で行動力のある運営を行い、人間として優れた元気な医師が多く育成できるように、研修医の皆様方を全力でサポートする所存ですので、今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。



スキルスラボでの実技研修

徳島大学大学院医歯薬学研究部定年退任教授挨拶

定年退任教授挨拶

徳島大学病院長

香 美 祥 二（医学部26期）

令和2年3月末をもって、平成16年（2004年）から約16年間務めた小児科学教授を退任することとなりました。昭和55年（1980年）に小児科に入局して以来40年間にわたり、医学部・病院でお世話になりました。心よりお礼を申し上げます。青藍会では、役員会で仕事をさせて頂きました。いつも暖かいご指導とご支援をいただきましたこと大変感謝しております。

教授就任直前に国立大学法人化と新臨床研修必須化があり、大きな変革のもとでの教室運営となりました。幸い優れた教室スタッフ、医局員に恵まれ、教室関係病院の先生方のご支援もあり大過なく退任を

迎えることができました。この間、教室の教育、研究、臨床においては専門性の高い成育医学・医療を実践することに努め、忙しくも有意義な時間を過ごすことができました。また、2012年から副病院長、2019年から病院長として病院を運営する立場をいただきました。副病院長時代には、青藍会東京支部や愛媛青藍会にお招きいただき支部の皆様とお会いできたことは楽しい思い出です。

退職後は専任の病院長として、病院、医学部、研究部、大学の発展に少しでも貢献できればと願っています。これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。



徳島大学大学院医歯薬学研究部新任教授紹介



徳島大学大学院医歯薬学研究部

公衆衛生学分野

森 岡 久 尚 (もりおか ひさよし)

昭和48年10月4日生

略 歴

- 平成11年3月 徳島大学医学部医学科卒業
- 平成11年6月 徳島大学医学部附属病院小児科研修医
- 平成12年4月 厚生省児童家庭局母子保健課技官
- 平成13年6月 厚生労働省老健局老人保健課主査
- 平成15年4月 内閣府原子力安全委員会事務局管理環境課安全調査官
- 平成18年4月 厚生労働省医薬食品局審査管理課長補佐
- 平成21年1月 米国 National Cancer Institute, Visiting Researcher
- 平成21年7月 厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課長補佐
- 平成23年4月 三重県健康福祉部医療政策監
- 平成25年4月 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部企画課長補佐
- 平成26年4月 厚生労働省老健局老人保健課介護保険データ分析室長
- 平成27年10月 原子力規制委員会原子力規制庁放射線対策・保障措置課企画官
- 平成28年4月 岐阜県健康福祉部次長（医療・保健担当）
- 平成29年4月 岐阜県健康福祉部長
- 令和元年7月 厚生労働省大臣官房付
- 令和2年1月 徳島大学大学院医歯薬学研究部公衆衛生学分野教授
（現在に至る）

就任のご挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部公衆衛生学分野
教授 森 岡 久 尚 (医学部45期)

令和2年1月1日付で徳島大学大学院医歯薬学研究部公衆衛生学分野教授を拝命しました。青藍会の先生方に謹んでご挨拶申し上げます。

私は徳島大学小児科入局後、黒田泰弘小児科教授（当時）に推薦いただき厚生労働省に入省し、約20年間公衆衛生行政に携わってまいりました。また、日本大学医学部公衆衛生学教室で、睡眠、飲酒などの公衆衛生学の研究に取り組んでまいりました。

青藍会については、上京後すぐから上田茂東京支部長のご指導のもと、支部運営の手伝いをさせていただきました。県庁への出向中も含めて、各地で活躍されている青藍会の先生方に地域医療などについて多くのアドバイスをいただきました。心より感謝申し上げます。

人口減少社会の到来と経済の低成長が続く中で、国レベルでは持続可能な社会保障制度の構築、各地では地域医療構想や地域包括ケアシステム構築の推進のための協議が進められております。今後は、これらの取組に貢献できるよう社会保障や保健医療の制度に関連した研究に取り組みたいと考えております。

最後になりましたが、青藍会の先生方には引き続きのご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。青藍会の益々のご発展を祈念し、就任のご挨拶とさせていただきます。



徳島大学大学院医歯薬学研究部
臨床神経科学分野（脳神経内科）
和 泉 唯 信（いずみ ゆいしん）
昭和40年2月16日生

略 歴

- 平成元年3月 北海道大学理学部数学科卒業
- 平成7年3月 徳島大学医学部医学科卒業
- 平成7年4月 広島大学医学部附属病院研修医
- 平成8年1月 翠清会梶川病院脳神経外科医師
- 平成8年4月 財団法人住友病院神経内科医師
- 平成13年3月 広島大学大学院医学研究科博士課程修了
- 平成13年4月 徳島大学医学部附属病院医師
- 平成13年7月 徳島大学助手（医学部）（難聴診療部）
- 平成16年1月 徳島大学講師（医学部）（神経内科講座）
- 平成20年4月 徳島大学病院医師（診療支援医師）
医療法人微風会理事長，社会福祉法人慈照会理事長
- 平成30年4月 徳島大学病院特任講師（神経内科）
- 令和2年2月 徳島大学大学院医歯薬学研究部臨床神経科学分野教授
（現在に至る）

就任のご挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部臨床神経科学分野
教授 和 泉 唯 信（医学部41期）

この度、梶龍児初代教授の後任として徳島大学臨床神経科学分野（脳神経内科）第二代教授の職務を拝命いたしました。

私は1995年（平成7年）3月に徳島大学医学部医学科を卒業し、徳島大学名誉教授（生化学）の山本尚三先生のご推薦をいただき、広島大学名誉教授中村重信先生が主宰されておりました広島大学第三内科（現 脳神経内科）で研修を開始いたしました。1996年（平成8年）4月から1998年（平成10年）7月まで大阪の住友病院で亀山正邦院長、宇高不可思神経内科部長はじめとする先生方に神経内科医としてのご指導をいただきました。2001年（平成13年）3月に学位を修得し同年4月から梶先生が着任されたばかりの神経内科教室（当時の名称は難聴診療部）に合流しました。

専門は神経難病と認知症で筋萎縮性側索硬化症（ALS）の病態解明・新規治療薬開発を研究テーマにしております。

梶先生が2000年（平成12年）11月に赴任されてから本年度で教室はちょうど20年を迎えます。今後、若手の先生方にも神経内科の魅力をしっかり伝え、次世代を見据えた活動を広げてまいります。まだまだ未熟者でいたらぬことも多々あるかと存じますが、何卒ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

徳島大学病院新任教授紹介



徳島大学病院病理部

坂 東 良 美 (ばんどう よしみ) (旧姓：大曾根)
(昭和37年11月21日生)

略 歴

- 昭和62年 3月 徳島大学医学部医学科卒業
- 平成 3年 3月 徳島大学医学部医学研究科 (生理系専攻) 博士課程修了
- 平成 3年 4月 徳島大学酵素科学研究センター (酵素細胞学部門) 助手
(平成 4年 3月 同 辞職)
- 平成 8年12月 徳島大学分子酵素学研究センター研究機関研究員
- 平成10年 4月 徳島大学医学部病理学第二講座助手
- 平成16年 4月 徳島大学ヘルスバイオサイエンス研究部環境病理学分野講師
- 平成20年 3月 徳島大学病院病理部准教授
- 平成31年 4月 徳島大学病院病理部教授
(現在に至る)

学会活動

日本病理学会 (評議員), 日本臨床細胞学会, 日本癌学会, 日本乳癌学会

就任のご挨拶

徳島大学病院病理部

教授 坂 東 良 美 (医学部33期)

徳島大学 AWA (OUR) サポートシステム女性研究者プロジェクト (上位職登用) により、平成31年 4月 1日付で徳島大学病院病理部教授を拝命いたしました。青藍会の先生方からご指導をいただき、家族の支えがあって、今日まで仕事を続けることができましたことを厚く感謝しております。

私は徳島大学医学部医学科を卒業後、徳島大学酵素科学研究センター、安藝謙嗣教授の指導のもとにフラビン酵素反応によって発生する酸素ラジカルと鉄の反応に関する研究を行いました。平成10年からは医学部病理学第二講座、泉啓介教授のもとで病理学を基礎から学び、平成20年からは病院病理部の准教授として業務に取り組んでまいりました。研究の時間がなかなかとれないのですが、乳癌を中心にした病理診断技術や予後予測因子の探求などの研究を行ってまいりました。

平成28年 8月に上原久典先生が病理部教授に就任され、病理部の診断や指導の体制が充実してからは、医学部、歯学部、学外の病理関係の先生方のご尽力もいただき、病理専門医の取得を目指す医師が徳島大学の病理部や病理学分野に集まってくるようになりました。若い病理医にとって魅力のある病理部にするために今後とも努力していく所存です。良質な医療を支える病理診断を行うために、ゲノム医療にも通じる質の高い病理診断を目指します。

青藍会の先生方には今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

留 学 記

堀 口 航

テキサス大学留学を終えて

堀 口 航 (医学科5年)

私は6月17日から8月9日までの8週間、アメリカのテキサス州ヒューストンにて短期研究留学のプログラムに参加させていただきました。私はMcGovern Medical School at UTHealthのInternal medicine of Cardiologyの研究室に所属しました。UTHealthというのはUniversity of Texasの医療部門の施設群の名称で、Medical Schoolはその一部として構成されています。今回、私が行ったプロジェクトは血管内石灰化予防薬の試験とアテローム性動脈硬化モデルマウスの確立の2つです。石灰化予防薬の試験はマウスの大動脈の平滑筋細胞を培養し、無機リン酸で石灰化を誘発した上でそれに石灰化予防が期待される薬剤を投与し、対照群とカルシウム沈着の差を測定するといった内容です。実験のプロトコル自体は非常にシンプルですが、細胞の培養や薬剤投与量の決定など、基礎医学実験に関して全くの素人であった私にとってはなかなかハードでした。やはりゼロから技術を英語で学ぶのは苦しいものがありました。そこで質問をしながらなんとか理解するというプロセスを踏んだことは私自身の英語力の向上に少しはつながったと思います。

2つ目のプロジェクトのモデルマウスの確立では、野生型マウスとApolipoprotein Eノックアウトマウスの2群に高脂肪食を与え、生体にどのような変化が現れるかを検証するものでした。血液サンプルを採取し、そのコレステロール等の値を測定しました。最も面白かったのは、生きたマウスの心エコーを撮ったことです。エコーでは主に大動脈の像を撮り、プラーク形成の有無を確認しました。

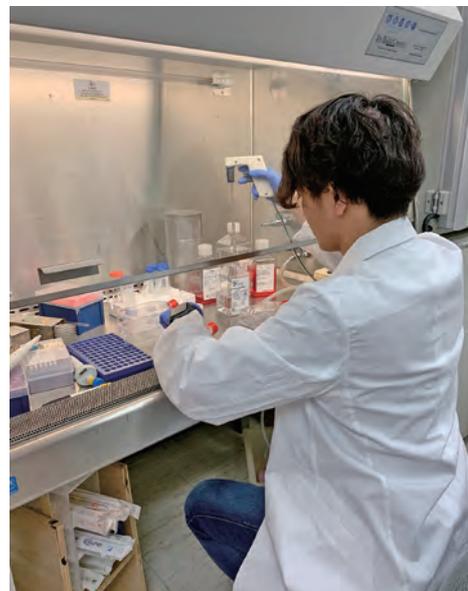
基本的にはこのプログラムは基礎研究に従事するものですが、空いた時間を見つけて臨床見学もさせていただきました。実験スケジュールが過密だったので2回しか臨床見学に行くことはできませんでしたが、どちらも非常に有意義でした。1つ目はTexas Children's Hospitalで感染症内科の先生の回診を見

学させていただきました。Texas Children's Hospitalはその名の通り小児科の専門病院です。私がお世話になった先生は感染症内科でも主にコンサルタント業務がメインで、抗菌薬の適正使用のために回診をされていました。複雑な症例が多く、Attendingのドクターと頻繁に議論されながら処方を考えているのが印象的でした。

2回目の臨床見学はMemorial Herman Hospital (MHH)の循環器内科でカテーテル手術の見学をさせていただきました。3症例見学したのですが最も印象的だったのは、TAVI(経カテーテル大動脈弁留置術)の手術です。カテーテルを大動脈付近まで持っていくにはある程度時間がかかっている様子でしたが、大動脈弁置換の瞬間は本当に秒単位で驚きました。また、さらに面白かったのはカテーテル手術でも分業がしっかりされていることです。実際にこの手術に関わっていたのは2人のAttendingのドクターと1人のFellowshipのドクターでした。

また、ヒューストンでは本当に多くの出会いがありました。テキサスの医学生はいつも優しく、臨床実習で見た症例についてやUSMLEの勉強法なども教えてくれました。さらに、多くの日本人研究者とお会いすることもできました。私はこれまで将来留学するのであれば臨床だけ、と思っていましたが研究留学で来られている先生方が楽しそうに研究内容を教えてくださる姿を見ていると研究留学をするということも視野に入れようと思いました。

最後に、この貴重な機会を与えてくださった丹黒前医学部長、赤池医学部長、国際課の村澤さんをはじめとする多くの先生方、職員の方々に厚く御礼申し上げます。



MD-PhDコース同窓会報告

徳島大学MD-PhDコース魅力発信セミナー／第5回近況報告会を開催しました

石澤 有 紀 (医学部54期)

2020年2月15日(土)、徳島大学MD-PhDコース魅力発信セミナー／第5回近況報告会を開催致しましたのでご報告申し上げます。

第5回の節目の開催であった今回は、特別講演に千葉大学医学部のMD-PhDコース第1期生で、現在アメリカ・ハーバード大学で研究室を主宰しておられる高橋恵美先生にお越しいただきました。近況報告会に先立ち開催したResearch Seminarでは先生のご専門分野である小児神経の基礎研究について「構造MRIと拡散強調MRIで見る脳の発生・発達の正常と異常」というタイトルでご講演いただきました。MRI画像を用いて小児の神経ネットワークの発達過程を観察することができ、精神神経疾患では特徴的なネットワーク構造が観察されるという、非常に興味深いお話でした。

続いて、今回はじめて県内の高校生にも公開して近況報告会を開催いたしました。本学MD-PhDコース卒業後、東京都立神経病院神経内科で勤務しておられる川添僚也先生に座長をお願いし、まずは高橋恵美先生に「女子医学生がMD-PhDコースに進学し、大学院生・ポストドクからラボを主宰するまで～アメリカでの研究生活・キャリアパス～」とのタイトルでご講演いただきました。高橋先生は大学院時代、東京大学の研究室に出向して研究を行い、学位取得後は渡米し、医師免許は取得せず研究者の道を歩んでこられました。そんなこれまでのキャリアと、現在のアメリカでのラボ運営について、研究環境、研究費の獲得、子育てとの両立など多岐にわたってお

話しいただきました。続いて本学卒業生であります、徳島大学大学院医歯薬学研究部呼吸器膠原病内科学分野／地域総合医療学分野特任助教三橋惇志先生に「MD-PhDコースを経て、呼吸器臨床医・研究医としての活動」と題しご講演いただきました。本コース卒業生が基礎と臨床の両輪で医学に携わることの意義や、県外での初期研修の後母校に戻られ、現在まさに臨床に研究に奮闘しておられる日々の様子についてご講演いただきました。

講演後は、高校生や学部1年生など若い学生さんたちから次々と質問があり、非常に有意義で活気のある会となりました。また、今回ビデオ会議システムZoomを利用し、サンフランシスコへ留学中の荻野広和先生にもオンラインでご参加いただきました。多くの卒業生がまだまだトレーニング期間中のため徳島に集まるのが難しい状況にありますが、このようなシステムも利用して、双方向の情報交換を継続していければと思います。

最後になりましたが、本会開催にあたりご支援いただきましたAWAサポートセンター、高等教育研究センターアドミッション部門の先生方、および医学部後援会に御礼申し上げます。また、青藍会の先輩諸先生方には日頃より格別のご支援を賜り、心より感謝申し上げます。MD-PhDコース同窓会会員は皆、それぞれの道で医学の発展に貢献すべく、研鑽を続けております。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



交流会での集合写真

準会員だより

河本知大
清水光希
松田晃輝

基礎研究との出会いを通じて

河本知大 (医学科5年)

私はMD-PhDコース生として、今春に博士号を取得し、現在は学部生として臨床実習に臨んでいる。本稿では、私がこれまで人類遺伝学分野の井本教授を始めとした先生方の指導のもと基礎研究に従事し得られた経験について記したいと思う。

思い返せば、私が研究に出会ったのは学部1年生のとき、入学して間もない頃に開催されたStudent Labの研究室紹介であった。当時、基礎医学研究に関して無知な私であったが、井本先生の紹介された研究内容になんとなく興味を持ち、少し研究室を覗いてみようと思った。そのような軽い興味がきっかけで学部の1～4年生、さらにMD-PhDコースを利用して大学院までずっと当教室で研究に従事することになったのだ。学生時代一番頑張ったことを聞かれば、自信を持って「研究です」と言えるほど研究に没頭してきたが、若いうちからの研究生活を通じて得られたものは大きかった。

その一つが、医学における基礎医学の重要性に気づくことができたことである。生理学や解剖学、組織学、遺伝学など様々な分野に細分化された基礎医学はじっくりと時間をかけて教わる学問であるが、多くの医学生や医師には軽視される傾向にある。しかしながら、基礎医学研究によって得られた知見が臨床研究に応用されたり、臨床現場で得られた疑問や知見が再び基礎研究に繋がったりと、基礎医学と臨床医学は表裏一体である。昨今ではtranslational researchといった臨床により近い研究も盛んに行われ、自身が直接基礎研究を行うことで、臨床医学との密な関係性を体感することができた。この経験とそこで得られた思考は、多種多様な症状を呈する患者さんへの実臨床の現場でも大いに役立つだろう。

もう一つが、様々な研究者との出会いである。大変光栄なことに、私は一つの専門分野に捉われることなく、様々な研究分野の先生方と共同研究を行わせていただいた。また、学部生の頃から長期休暇を利用し、東京や京都で開催されたバイオインフォマ



ティクスの講習会など、国内国外問わず多くの学会にも参加した。さらに、院生の間には約1年半愛知県がんセンターへと国内留学させていただいた。そこで出会った研究者の方々から、研究面だけでなく様々な面で貴重な話をお聞きすることができ、その出会いは私の見える世界を大きく広げた。このコミュニティは私にとって今後もかけがえのないものである。

上記の他にも、日本学術振興会特別研究員として公的基金を用いて医学研究を行うことへの責任感や、聞き手のことを考えたプレゼン力、新たな仮説を立て、その仮説検証のための実験計画を考え、得られた実験結果を考察する能力など、研究生活を通じて得られたものはここで紹介できない程ある。

学部を休学し、先に大学院へと進学するMD-PhDコースはもちろんメリットばかりではなく、元の学年から離れることもあり心理的負担などデメリットもある。近年は、臨床実習の長期化や専門医制度の確立によって、本コースを選択する学生が減り、博士号自体を取得しない人も多い。しかし、基礎医学と臨床医学のいずれを将来選択するにしても、一度基礎研究をじっくりと時間をかけて行うことを私は経験者として推奨したいと考えており、大学院の3年間も研究に専念することができる本コースは選択肢の一つに十分に値する。

最後に、ご指導を賜りました井本先生をはじめとしたお世話になりました諸先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

医学生とは

清水光希 (医学科5年)

医学部に入学してもう4年が経ちました。とても早かったようで思い返してみれば多くのことを学べたような気がします。中でも一番学べたのは人の命の大切さだと思います。最近では患者さんと触れ合う機会も多く、今までは教科書の中だけだったことを実際の現場で体験できるということに感動を覚えました。

突然ですが皆さんは富士山に登ったことはありますか。自分は去年の夏に登ってきました。今思い返してみると登山は医学生の6年に例えることができるのではないかなと思います。1年生の頃は自分は医師になるための一歩を踏み出せるんだという期待に胸を膨らませていたと思います。それはまさに富士山の麓で富士山を見上げながら今からこの山を登るのかという思いに似ています。2年生になると一

青藍会の動き

青藍会出身教授一覧

(令和2年4月1日現在)

氏名	期	大学名	講座	氏名	期	大学名	講座
田村 禎通	17	徳島文理大学	理学療法学科	久保 宜明	34	徳島大学	皮膚科学
木内 淳子	18	滋慶医療科学大学院大学	医療安全管理学	西岡 安彦	34	徳島大学	呼吸器・膠原病内科学
泉 啓介	19	徳島文理大学	看護学	西良 浩一	34	徳島大学	運動機能外科学
横関 博雄	26	東京医科歯科大学	皮膚科学	橋本 一郎	34	徳島大学	形成外科学
北畑 洋	26	徳島大学	歯科麻酔科学	志馬 伸朗	34	広島大学	救急集中治療医学
東 敬次郎	26	徳島文理大学	看護学	篠原 勉	34	徳島大学	地域呼吸器総合内科学
斧 康雄	27	帝京大学	微生物学	田中 克浩	34	川崎医科大学	乳腺甲状腺外科
丹黒 章	27	徳島大学	胸部・内分泌・腫瘍外科学	高橋 章	35	徳島大学	予防環境栄養学
峠 哲男	27	香川大学	健康科学	松田 純子	35	川崎医科大学	病態代謝学
川上 照彦	27	吉備国際大学	理学療法学科	相澤 徹	35	環太平洋大学	体育学部
内藤 毅	27	徳島大学	国際センター	堀井 新	35	新潟大学	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学
鶴尾 吉宏	28	徳島大学	顕微解剖学	篠原 尚	35	兵庫医科大学	上部消化管外科
下泉 秀夫	28	国際医療福祉大学	医療福祉	早瀬 康信	35	徳島大学	地域小児科診療部
金山 博臣	28	徳島大学	泌尿器科学	安友 康二	36	徳島大学	生体防御医学
重光 修	28	大分大学	救急医学	矢野 聖二	36	金沢大学	腫瘍内科/腫瘍外科
糟谷 英俊	28	東京女子医科大学	脳神経外科	井原 義人	36	和歌山県立医科大学	生化学
谷 憲治	28	徳島大学	総合診療部	田中 克哉	36	徳島大学	麻酔・疼痛治療医学
上田 夏生	29	香川大学	生化学	岩田 貴	36	徳島大学	医療系基盤教育
橋本 雅章	29	国際医療福祉大学	脳神経外科学	松崎 健司	36	徳島文理大学	診療放射線学科
宇野 昌明	29	川崎医科大学	脳神経外科学	住谷 さつき	36	徳島大学	特別修学支援
江原 寛昭	29	滋賀大学	障害児教育	上原 久典	36	徳島大学	病理部
伊藤 裕司	29	純真学園大学	医療工学科	川人 伸次	37	徳島大学	地域医療人材育成
横越 浩	30	四国大学	生活科学部	粟飯原賢一	37	徳島大学	糖尿病・代謝疾患治療医学
橋本 健志	30	神戸大学	保健学研究科	小山 文彦	37	東邦大学	産業精神保健・職場復帰支援センター
勢井 宏義	30	徳島大学	統合生理学	中村 教泰	38	山口大学	器官解剖学
近藤 和也	30	徳島大学	臨床腫瘍医療学	遠藤 逸郎	38	徳島大学	生体機能解析学
安井 敏之	30	徳島大学	生殖補助・更年期医療学	添木 武	38	徳島大学	実践地域診療・医科学
森 健治	30	徳島大学	子どもの保健・看護学	友竹 正人	39	徳島大学	メンタルヘルス支援学
加藤 真介	30	徳島大学	リハビリテーション部	桑原 知巳	39	香川大学	分子微生物学
安倍 正博	30	徳島大学	血液・内分泌代謝内科学	前川 洋一	39	岐阜大学	寄生虫学・感染学
石堂 一巳	31	徳島文理大学	健康科学研究所	奥村 裕司	39	相模女子大学	健康栄養学科
上野 修一	31	愛媛大学	精神神経科学	松浦 哲也	39	徳島大学	脊椎関節機能再建外科学
赤池 雅史	31	徳島大学	医療教育学	井崎 ゆみ子	39	徳島大学	キャンパスライフ健康支援センター保健管理部門
鈴江 毅	31	静岡大学	教育学部	大塚 秀樹	40	徳島大学	画像医学・核医学
三上 靖夫	31	京都府立医科大学	リハビリテーション医学	山田 博胤	40	徳島大学	地域循環器内科学
原田 雅史	32	徳島大学	放射線医学	和泉 唯信	41	徳島大学	臨床神経科学
高橋 吉孝	32	岡山県立大学	栄養学	居村 暁	43	徳島大学	地域外科診療部
寶學 英隆	32	奈良先端科学技術大学院大学	保健管理センター	大藤 純	43	徳島大学	E R・災害医療診療部
川人 宏次	32	自治医科大学	心臓血管外科	堤 保夫	43	広島大学	麻酔蘇生学
吉栖 正典	33	奈良県立医科大学	薬理学	酒井 紀典	43	徳島大学	地域運動器・スポーツ医学
二川 健	33	徳島大学	生体栄養学	酒井 陽子	43	徳島大学	麻酔科診療部
岡久 稔也	33	徳島大学	地域総合医療学	伊藤 弘道	45	鳴門教育大学	特別支援教育
浦上 淳	33	川崎医科大学	総合医療センター外科	森岡 久尚	45	徳島大学	公衆衛生学
坂東 良美	33	徳島大学	病理部				

市立三野病院院長就任にあたって

三好市国民健康保険市立三野病院院長

宮田 淳也 (医学部42期)



平成31年4月1日付で市立三野病院院長を拝命しました宮田と申します。就任にあたり青藍会の皆様にご挨拶させていただきます。平成17年7月に市立三野病院に内科医長として赴任し、前院長である中西嘉巳先生、前副院長の中西美枝先生と共に、徳島県西部の地域医療を守るべく努力してまいりました。特に関節リウマチの内科的治療には注力して取り組んできたつもりであり、平成19年からはリウマチ外来を開設し継続しております。この診療体制を維持するために、

私の院長就任と同時に三好市の寄付講座として地域リウマチ・総合内科学分野を開設して頂き、2名の医師派遣を受けることができました。寄付講座開設に当たりご尽力頂いた呼吸器膠原病内科西岡安彦教授にこの場を借りてお礼申し上げます。

徳島県西部地域のリウマチ診療の中心となるべく、今後も努力していきたいと考えております。また当院は地域の市立病院として、地域包括ケアの中心となるという役割も当然担っております。当院60床のうち30床が地域包括ケア病棟となっておりますので、この部分もさらに発展させていきたいと考えております。今後とも皆様のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。



青藍会館前の桜

投稿規定

広報委員会

○ 原稿について

- 必ず、文頭にタイトル、氏名・卒業期をご記載ください。
例 タイトル○○○○○○ 山田太郎(医学部○期)
- 文字数は1,400字以内、写真は1枚でお願いいたします。
なお、写真には見出しあるいは説明文を必ずつけてください。
- 英数字は半角文字で、カタカナは全角文字で入力してください。
- 原稿の文中に登場する氏名及び敬称については、スペースを入れずに記載してください。
(例 山田太郎君 高倉健さん 松下幸之助先生)

○ 原稿及び写真の送付について

- 原稿送付は、可能な限りメール添付または電子媒体にてお送りください。
プリントされた写真については、郵送にてお送りください。後日、返送いたします。
- 画像ファイルを送付される場合は、原稿とは別に、JPEG ファイル等でお送りください。
原稿（Word 等）に貼り付けますと、画質が悪くなります。
なお、画像ファイルの容量が大き過ぎますと届かないことがございます。容量を小さくして1枚ずつに分けてお送りください。また、青藍会事務局からの連絡がなかった場合は、届いていないことが考えられますので、再度確認のご連絡をお願いいたします。

○ 原稿の締め切り日を厳守願います

会報の印刷および製本には、原稿をお預かりした後、ゲラ刷り作成、校正、修正、編集会議等で2ヶ月ほどの時間を必要といたします。

締め切り日より遅れた場合は、次号の掲載になりますので予めご了承ください。

○ 編集作業について

- お送りいただきました原稿は語句などに関して広報委員会で校閲させていただきます。その結果、修正をお願いする場合もございますことをご了承ください。
- 用語や表記などの統一のために文章に手を入れることがございます。予めご了承ください。

○ 原稿校正について

- 広報委員会で会報全頁のレイアウト等を校正後、製本前のゲラ刷りを作成しお送りさせていただきますので、著者校正をお願いいたします。
- 校正時の大幅な追記、削除等は、会報発行期日に影響いたしますので、ご遠慮くださいますようよろしくお願い申し上げます。

事務局からのお願い

◆ 個人情報の取り扱いについて ◆

平成17年から個人情報保護法が施行され個人情報は厳重に取り扱うことが求められています。青藍会事務局におきましても会員の個人情報は慎重に管理し、取り扱いにつきましては細心の注意を払っております。従いまして電話等での**会員情報の提供につきましては原則お断り**をさせていただきます。会員のプライバシー保護とトラブル防止のためより一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

電子化の昨今ではございますが、**会員名簿を大いにご活用くださいますようお願い申し上げます。**

ご注意ください!!

なりすましのニセ電話について

「青藍会事務局の〇〇です。会費のことで・・・」という青藍会事務局事務員になりすましたニセ電話の事例が数件報告されております。

過去には「青藍会の〇〇です。」「医学部第〇期卒の〇〇です。」「徳島大学の〇〇です。」「〇〇病院の〇〇です。」という同窓生や「青藍会のお荷物のことで・・・。」という宅配便業者になりすましたニセ電話の報告もございました。電話の内容によりますと青藍会に関する情報に詳しい場合がございます。

青藍会事務局では、突然の電話による会費のご案内や個人情報の照会はいたしておりませんので十分お気をつけくださいますようお願い申し上げます。勤務先及びご家族（帰省先）の皆様にも注意の呼びかけをお願いいたします。

青藍会事務局では電話によるご案内はいたしておりません。また電話による照会につきましてもお断りいたしております。

くれぐれもなりすましのニセ電話にはご注意ください!!

◆ 会員のページをご活用ください ◆

青藍会ホームページには、青藍会会員に限っての会員専用ページ（非公開）【**会員のページ**】を設けております。会員のページを閲覧するには、ユーザー名・パスワードを入力の上、ログインしていただく必要があります。会報末尾に綴じ込みの「FAX 用紙」に必要事項をご記入の上、青藍会事務局まで申し込みをお願いいたします。



第37回青藍会・医学科講演会開催のお知らせ

第37回青藍会・医学科講演会を開催いたします。多数のご参加をお待ちしています。



講師 隠岐広域連合立隠岐島前病院 院長
白石 吉彦 先生

演題 「地域医療はおもしろいで！」

座長 徳島大学病院総合診療部 特任教授
谷 憲治 先生

日時 令和2年10月22日(木)18時30分～20時

場所 徳島大学藤井節郎記念ホール(蔵本キャンパス)

略歴

- 1992年 自治医科大学卒、徳島で研修、山間地のへき地医療を経験
- 1998年 島根県の隠岐諸島にある島前診療所（現隠岐島前病院）に赴任
- 2001年 院長になり、周囲のサテライトの診療所を含めて総合医の複数制、本土の医療機関との連携をとりながら、人口6,000人の隠岐島前地区の医療を支えている
- 2014年 第2回日本医師会赤ひげ大賞受賞

著書

- 離島発 いますぐ使える！外来診療小ワザ離れワザ(中山書店：2014)
- THE 整形内科（南山堂 2015.5 雑誌「治療」編集幹事）
- THE 整形内科（南山堂 2016.5 書籍 編集幹事）
- 離島発とって隠岐の外来超音波診療（中山書店：2017）
- 離島発とって隠岐のエコーで変わる外来診療（中山書店：2019）

所属 日本プライマリ・ケア連合学会

白石吉彦先生は徳島県出身で、自治医科大学を卒業された後、国民健康保険相生診療所（徳島県）などの勤務を経た後に、1998年から島根県隠岐諸島の島前診療所に赴任し、総合医の勤務体制、都市部の高度急性期病院との連携システム、医療・福祉の一体的サービス展開を築き上げてこられました。多くの著書も執筆され、白石メソッドともいえる知恵や工夫は全国的な地域医療のモデルとなっています。

徳島大学病院総合診療部 特任教授 谷 憲治

※新型コロナウイルスの感染拡大のため開催が中止になる可能性もありますので、最新の情報については青藍会ホームページをご覧ください。

共催 青 藍 会
医 学 科

編集後記

ほんの半年前には、日常生活がこのように激変するとは想像もつきませんでした。新型コロナウイルスのパンデミックによって、医療の現場は混乱し私たち医師の踏ん張りが試されています。会員の皆様がお元気で日々を過ごされることを心よりお祈り申し上げます。

私は昨年から広報委員として青藍会活動に参加させていただいております。今回の会報原稿を拝読するにあたり、実に多くの先生方が日本国中、海外でも活躍されているご様子を知り、長い歴史のある青藍会の一員であることを改めて誇らしく感じました。また、たくさんの同窓会報告の中で、皆様が学生時代の無邪気さに戻って楽しまれているご様子に心が温まりました。

私たちの学年も2年前に有馬温泉で同窓会があり、同級生たちと旧交を温めることができました。その時にグループLINEもできて、アルバムを共有し、時々トークが飛び込んできます。どこかで繋がっているということは心のよりどころになるものだと感じました。また、昨年は気心の知れたポリクリ仲間の同級生6人で集まる機会もあり、これはまた実に楽しく時間がたつのも忘れるほどでした。それぞれに教授や病院長など施設のトップの地位で仕事をされており、「まあ、偉くなって～！」と嬉しいやら頼もしいやらでした。

新型コロナウイルスとの共存を強られるこれからですが、事態が良き方に向かい、皆様方の活躍の場が制限されませぬよう、そして楽しい同窓会が開催できますよう願っております。これまでのところ、徳島県では幸いに感染者は少数にとどまっていますが、かかりつけ医としては、いつ何時感染している患者さんを診察するかわからない不安と緊張の毎日です。県外へ行くのも自粛せざるを得ない状況で、旅好きとしてはつらい面もありますが、今は徳島の山や海など、自然の素晴らしさを再発見したいと思っています。診療後や休日の講演会もなく、勤務中のMRさんたちの訪問もなく、気楽でシンプルな日常もある意味では得がたいもので、日日は好日です。

工藤美千代（医学部33期）

非 売 品
青 藍 会 会 報 第 95 号

令和2年6月10日印刷
令和2年6月17日発行

編 集 徳島大学医学部医学科同窓会青藍会
〒770-8503 徳島市蔵本町3丁目18-15
電話 (088) 633-7109 (内線2601)
FAX (088) 633-3180 (青藍会事務室)
E-Mail seiran@tokushima-u.ac.jp
URL <http://www.seirankai-tokushima.jp/>
振替 01680-4-8671
ゆうちょ銀行 一六九店 (169)
当座 0008671 青藍会

発 行 者 青藍会会長 桜 井 え つ

印 刷 所 グランド印刷株式会社
徳島市万代町6丁目20-15 電話 (088) 622-8448
